

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
行(毎月一回・十五日發行)

(通第三六〇号)

二世の利益	白井成允	(1)
一道会の記	榎原徳草	(5)
宗教の信について	松本解雄	(10)
ピート師を憶う	山田宰	(12)
仏 ^{63.9.3パ} 詩抄	木村無相	(17)

次 目

撮天念上月一輪	花田正夫	(19)
取不捨	石田十九三	(22)

慈光

第三十一卷 第六号

二世の利益

白井成允

四

然し注意するを要します。この者は現に依然としてなおこれ凡夫に過ぎないことを。この者はいまだ仏の覺りを開いた者、仏と成れる者ではありません。「淨土真宗には今生に本願を信じて彼土にてさとりをば開くとならしい候ぞとこそ、故聖人の仰せには候らいしか」（歎異抄十五章）とあります。だから蓮如上人も「一心決定のうえ、弥陀のおんたすけありたり、と云うは、さとりのかたにしてわろし、たのむところにてたすけたまい候ことは歴然に候えども、御たすけあらうず、と云うてしかるべきの由」誠めておられた（問書二〇四條）御助けありたる正定聚の境涯をさとりの境涯と取りちがえて考えることは驕慢の至極であります。

「自分はもう信仰を得てしまつたから、もうさとつたのである」とたかあがりをすることは、恐れ愧しなければならないことです。

如何に信心決定したと云つても、我身は依然としてあさ

ましい凡夫です。煩惱罪濁の身、虚偽不実の心、如何ともしてみよのない身であることに変りはありません。久遠劫來の宿業のむきいであるから、今になつてどうも致し方がない、さればこそ仏の御憐れみをこうむり、さればこそお念仏もうすのであります。念仏以外に成仏の途の絶えはてた者に念仏を与えられたのです。これをどうしてすでにさとれる者と自覺することができます。

淨土真宗に帰すれども眞実の心はありがたし

というう祖師のご悲歎を読ませていただかなくてはなりません。「聞書」にも次のよくな問答があります。

順誓申上げられ候「一念発起のところにて罪みな消滅して、正定聚不退転の位に定まる」と御文にあそばされたり。然るに「罪はいのちのあるあいだ罪もあるべし」と仰せ候。御文と別にきこえ申し候やと申上げ候とき、仰せに「一念のところにて罪みな消えて」とあるは、一

念の信力にて往生定まるときは、罪は障りともならず、然ればなき分なり。いのちの娑婆にあらん限りは罪は尽きざるなり。順誓ははやさとりで罪は無きかや。聖教には一念のところにて罪消えてあるなり、と仰せられ候。

（下略、第三五条）

この娑婆に生きている間は罪は無くならない凡夫であります。（ここに自己の罪業の告白がある）然しその罪は如何に深く重くとも、もつて往生淨土の障害とはならない、何となれば、罪の者を救うという仏智が無限でありますから（ここに他方の絶対の信がある）罪の身が罪の身のこのままにして、仏智に照らされ、仏の淨土に参らせていただける、これは仏陀の御涙の故であり、南無阿彌陀仏の故であります。決して他に故あるのではありません。

さて次に、念佛の当益「御たすけあらうずることのありがたさよと申す」念佛、滅度のさとりのかたを喜ぶ念佛について省みさせていただきます。

正定の聚とは、一たび仏の慈悲を聞き得て、もうどんなことがあつても、必ず仏の御救いのうちにあることの知られた者のことである。この者は現在この生活において、朝夕仏のお慈悲のうちに生きるのでありますから、この者にとりての仏の御救いということは、現在の生活の中

に直ちに味わわれることであります。もとより現在の生活を離れて別に御救いがあるわけのものでありませんが、然しその故にとて直に将来の生のお救いということをなおざりに考えてはならない。否、むしろ後者の方が眞實に一大事と注意されねばならないのであります。

いつたい仏教の根本の目的は吾等が仏道を成就する、即ち仏のさとりを開く、即ち仏と成ることに存します。仏教は吾等を仏と成らしめる仏の教であります。吾等は「現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沈み、常に流转して出離の縁あることなき」煩惱具足の凡夫、三世にわたつて迷い來り、迷い去る愚者であります。この迷いの凡夫をして、その迷いを転じてさとりを開かしめることに仏の教はあるのであります。南無阿彌陀仏のお慈悲も、この迷い迷うて行方を知らざる凡夫を易く仏と成らしめようとして働いてくださるのであります。仏様のお救いというのも究竟してこれなので、この他にはないのであります。

現在においても、腹の立ち易い者は自然に腹を立ててしまふのであるが、その者のかかる有様をみそなわし憐れみますお慈悲を聞かせていただけば、その腹の立つことがお慈悲に対して勿体ないと感ぜられてきて、念々稱名常懺悔というように、腹が立つとその煩惱を縁としてお念佛にかえらせていただくのであるから、即ち、今までのよう

に煩惱のままでいよいよ繁り繁げつて行くのではなく、一々の煩惱の動く毎に、即ち菩提(さとり)の縁を加えていた

だくのであるから、ここに煩惱の凡夫のお救いがあらわれるのであります。然しお救いは、究竟しては一切の煩惱の濁つた波はうごかず、ただ功德の水の澄み渡る大なるさとの境涯において成就するのであるから、それは即ち凡夫の境涯を脱していくよいよ仏と成った時に完了されるのであります。かかる時は、即ち南無阿弥陀仏の御恵みにて淨土に往生させていただいた時にほかならないから、お救いは淨土において完き果を証すのであります。

或は言ふ者がある「私のような煩惱の者を憐んで下さるお慈悲を聞いた上は、もうどうなつてもかまわない、死後の事などは問題にはならない」と。この言葉はそれでよい。然し或は注意しなければならない、煩惱の者を憐んで下さるお慈悲とは、何時死んでも必ず淨土に往生せしめて下さるお慈悲なのであるから、そのお慈悲のお念佛と共に往生淨土の望みは確かになつていなければなりません。死後のが問題にならないとは、地獄より他に行く處もない凡夫がお慈悲のお念佛ばかりで必ず淨土に参らして下さるから、則ち気にかかるないのである。もしうでなくて往生淨土の信も確かならず、自己の行末のことも明らかならず、三世の生命についてはつきりしたこともなくて、唯だお慈悲

があるからのんきにまかせているのでは、恐らくお慈悲の真実を聞いた者ではないでしょう。南無阿弥陀仏は淨土往生の大行なのであります。
然し私の方で淨土に往生するのだと定めておくのではない。お念佛申して、それによつて淨土に参るのだと私の方で思い定めたとて、それが何になりましようか。自分の欲望から築き出したお淨土やお念佛は、すべてこれ罪惡の凡夫のもの、流転無常のものにすぎない。私はそんなものによつて救われはしない、淨められもしない。そうでなくして、唯だ弥陀の他力からたまわるお念佛によつて、弥陀の淨土に参らせていただくのであります。御たすけあらうするこのありがたさよと申す念佛とは、娑婆の生命終るとき、即ち淨土に生れしめられ、仏のさとりを開かしめられるであります御恵みをよろこびて「ありがとうございます」と申す念佛であります。淨土往生の信の上によろこぶ声であります。

六

南無阿弥陀仏はいのりではない、つとめでもない、それは感謝慶讃の声であります。御たすけありたるとよろこぶ念佛、御たすけあらうするとよろこぶ念佛であります。

もとより念佛にこの二種があるのであります。御たすけありたる」とは、何時死んでも必ず淨土に往生するに

決定してしまった身の上となされたることの自覚であるから、即ち「御たすけあらうする」と別の事ではない。又「御

たすけあらうする」というのも、現在恵まれていてのまがずっと続いて延びて行くことなのであつて、別に新しい出来事が起り加わるのではないから、即ち「御たすけあられたる」と別の事ではない、共にこれ同一事であります。「いずれも仏になることをよろこぶこころ」で、仏法の眞実の目的を到達しうること、仏道成就のよろこびなのです。蓮如上人は、これを「よし」と讃めたもつたのどうにならうではありませんか。

京成光化門ホテルにて、昭和二年九月二十日夕、稿し終る。

青蓮華　白井成允

昭和三十三年

あれをせんこれをせんとて何一つなしえで朽ちんこのいのちかや

あめつちにみつる数無きみめぐみに護られきたるこのいのちなり

七十路の懈慢の罪よ弥陀仏の御名を聞きつつあはれ慚づべし

④ わが齡七十年にみちし朝夢にあれましわが母上かな

天地のさなかにたてる命なりとこよの道の光あびつ

劫初より誓ひたまひし弥陀仏の誓ひの御名を聞くいのちかな



たまゆらの世に生まれきて永へのさとりの道をきくべか

りけり

昭和四十一年

一 道 会 の 記

榊 原 德 草

次ぎに北岡行男先生のお話は、大略次の通りであります。

私も今日こうして命ありましてこの会に連らせていただくことは嬉しく有難いことであります。私は話すことが不得手ですので、感想を書いてきました。時間の節約にもなりますので……。

私は生来横着で、やせ我慢で、短気者で、怠け者であり、何の取りえもないにかかわらず、高慢であります。またそ

れと全く反対で、極端に自己評価して劣等感におちいります、病的なほど劣等感にさいなみます。この両極端の間を迷いまして、これは精神分裂症になるのじやないかと恐れることがあります。これは少年時代から現在の老年時代にいたるまで一向変つておりません。

この自己混乱、自己蔑視の闇黒の中に、ほのかな灯がともるようになりました。ふやけた綿の様なかたまりの内に一条の心が通つており、かろうじて生かしてくれました、

自己の非力など、身辺に殺倒する困難な出来事は絶えることはありませんが、それら諸々の憂さをふわりふわりと乗り越えさせて頂いて居ります。私はあの日、あの時刻に一生を劃した、所謂廻心を体験させていただきましたが、あえて一念に拘泥するものではありません。親鸞聖人も、一念に非ず、多念に非ず、と仰せられています。

頓機とは心の百八十度の転回であり、革命であり、停電

の間にパッと電灯がともつたようなものであります。漸機とは幾たびか宗教的体験を重ねて、次第に心が開けてゆき、例えば夜の闇が薄らぎ、それが全く明るくなり、或は紅葉が日を追うて色濃くなるようなものであります。いずれにせよ、人にはそれぞれの縁があり、性格、環境、因縁等によりまして、入信の経路も人様々に異なるものと思ひます。池山先生は明瞭な廻心を通られました。光の滝を浴びたような体験をなさいました。白井先生は漸機型で、次第に信仰が深くなられたお方であられます。

信仰はたまわるものであります、棚ぼた式にゆかぬようであります。能う限り求道心を旺盛にして、ひたすら仏法の御縁に触れて、その上で時節の到来を待つべきであると思います。池山先生がよく仰言いましたが、力こぶがはいる間は駄目だ、握りこぶしがゆるまなくつちや本物ではないよ、と。そして次のような俳句を作られました。

昏倒しそうな私を支えてくれております、私を鎮めてくれます、劣等感に沈んだ私を浮きあがらせ、力づけてくれます。大地の底を流れる一脈の蕪氣のような力は、彼方から来る大きな力がその源泉であります。

源泉の大きな力を池山先生は「信仰とは大きいなる力と、力なきとの結びつきである。ひ弱い者が大きいなる力から呼びかけに応じて、受けごたえする状態である」と、仰言いました。

私が大いなる力の呼びかけに応じて答えたのは、数え年五十四才の秋、今から二十二年前、この一道会のこの席上におきまして、榊原さんの居られる前で、花田さんの導きによって、長夜の闇が晴れたのであります。

それからも明闇常なき怠惰な生活が続いて居りますが、心の底に埋れ火のような温かさがあり、それが私を温め力づけてくれます。この力のお陰で、この娑婆世界の種々の障害、家庭の悶着、子供のこと、身体的外症、自我の混迷、

仰向けに 子犬寝ころぶ 日和かな

ひなた

勿論、人間は社会的動物です、努力、奮闘、ファイトは必要であります。あらゆる人間的いとなみの底に、春の海のよくな、大らかな、豊かな心境がたたえられていてこそ、生と死を超える、個体意識を絶した、仏凡一体の境地が開けるのではないでしようか。甚だ広言を申し失礼いたしました、老いのたわごととお許しを願います。

次に福本慶子さんのお話は大略次のようでありますただし録音が不調となつておりましたので文字通り大要となりましたことをおわび致します。

最近、私の心底にありますことは、私もすでに六十六になりました「まだお母さんがいらっしゃいます」と云われておりましたが、その母も亡くなり、もう一周忌もすませました。そんなに長い間、お母様に甘えていたのかと言われる方が多いと思いますが、私が仏法を聞くようになつたのは十七八才の頃で、祖母に連れられて、御法座に連なりました。

そういう祖母と寝起きしている間に「お説教を聞かせていたくものだ」という体制を身につけさせて貰いました。祖母も母も、まあ私も含めまして、当時の私の家庭は変

動の多い生活でした。私はまた二十才に満たない年ですか
ら、家庭が経済的に変動していくも悲しいとは思いますが、
矢張り未来のある若者にとっては、それ程切実なものでは
なかつたのです。けれど祖母や母にしてみれば、家庭の非
常に大きな問題だったと思うのです。そんな中でお念仏を
聞く座に引つ張ってくれた祖母や母、そのおかげでお念仏
の道は開かれてまいりました。

祖母と母との教養と申しますのは、祖母は字も書きまし
たが、母のような教育を受けていなかつたのです。しつか
りよく働く人でした。母はお嬢さん型の人で祖母と違つて
いました。それで祖母も母も共に互に辛棒して居つたよう
で、そんな家庭ですと育ちました。それが私に一つの悲
しみのようなものを染み付けていたと思います。

そうした家庭の中からたた一人の弟を戦争に出し駄目
かと思つていていたのが、無事帰還して共に暮しました。祖母
は勝気で老いても母の門にはくだらず、母も同様でいつま
でもいがみあつてゐるのもなかつたんです。あれは全
く育ちの問題だと思いますが、そうした仲で、お念佛だけ
は参らせていたくだんという生活が身についたようでござ
ります。それは本当にありがたいことだと思います。仏
様のありがたい御はからいの世界ということを聞かせてい
ただき、私共は年を経てやがて死ぬにきまつていていますけれ
ども、

ども、いづれはまた会える世界があることを信じているん
です。祖母も母も亡くなり、私一人残りました時に、あま
り可哀想とは思つていただけないんですけども、女の道
は、すでに韋提希夫人の時に開かれていたと、しみじみ感
じさせていただきます。

私はそういう家庭でありますので、奈良の学校に在学
して居つた時に梅原真隆先生のお話があるとボスターが出
ておりまして、伺いました寺が淨教寺さんでした。このお
寺で池山先生、花田先生その他の先生の御縁にあうことが
出来ました。そう云う御縁を祖母や母が開いていて下さつ
た、そんなことを思い遠い宿縁をよろこび、深い感懷にひ
たることがあります。失礼いたしました。

木村無相さんもこの御馳走が美味しいのだと喜んで坐る、
そして話がはずむ「現世利益和讃は聖人が御制作なさつた
が、あれは現世じゃない、現時である、今だ。だから現在
た」

利益和讃だ」と云う。

私は此頃、過去現在未来と時間を三つに分けることにつ
いて、我々は過ぎ去つたことを過去といふ古い袋に包みこ
んで薄暗いうしろの方へ片付けて、死体のよう投げ捨てる
が、三千年の昔に釈尊が説かれたのも、その時の「今現
在説法」で現在、七百年前の聖人の仰せも、その時の現在
である。現在がずっと続いて未来の現在にわたつてゐる。
そんなことを思つて形骸化される過去に光りを見、未来に
も幻の形を消して生々躍動を見る、そんなことを思つた。

鈴木大拙師の坐談集の一冊の中に、曾我量深師、金子大

栄師などの坐談が載つてゐるが、そこで曾我師の話の中に、

過去に過現未の三世があり、現在にも然り、未来にも然り、
合せてこれを九世といふ。この九世を見ることが十世で、

これは絶対現在である、と云い、法華経に出てゐる、その

お話を見出した。

法華経を拝読すると、釈尊は無常を知らせんために涅槃
に入るが、これは衆生に方便として死を示すので、眞実の
仏は永遠に死なない、そして一切衆生と仏とは親子である、
ということが説かれている。私はそんなことを思い、そし
て仏教に導かれた御縁を有難く思いました。

木村さんはそんな話を続けて大日経に「三世を超えたる
如来の目」という言葉を思い出す、目とは今のことである
お話を見出した。

そして又「求法用心集」中の源通寺の禿頭城師の「今」
という御縁、又金子師の「聞思室日記」に今があるとのこ
と。求法用心集中の今につき、木村さんから一道会終了後
に手紙を頂きましたのでその一部を記させて頂きます。
一、今が往生か墮獄かの大
二、今のお助けにあい奉る
三、いつもいつも今の出立ちじや
四、今の御喚声が、
五、今どう聞こえる
(略)

八、今でなければ後生でも、仏法でもない、また他力と
いうことも立たぬことになる。

(略)

金子師の「聞思室日記」。これは師の九十二才で往生にな
られる約二ヶ月前の手記にある御言葉と木村さんは註解し
ています。

「今」

「今現在説法の今は今
於今十劫の今も今

塵点久遠も今深し

呼吸の間も今ひろし

老衰しても今は今

病みてありとも今は今

(略)

靈鷲の説法、遠くとも

諸行無常は今の今

諸法の無我は今の今

如是我聞の今は今

七百年の後を追い

祖聖を慕い語るうと

本願信する今は今

念仏申す今ここに

定聚の位今すでに

大悲護念

慈悲護念の夜は明けて

慈悲護念の日はくれて

今生畢竟今は今

おおその今よ已に今

永遠の今

(昭和五十三年十二月二十六日記)

- 9 -

宗教の信について

松本解雄

どの宗教も「信」がその核をなしているが、私はここで仏教に限つて、すこしく述べてみたいと思う。仏教の究極の目標は成仏にある。その実現する道で、いわゆる自力聖道門と他力淨土門がある。いまこの信を論ずるにあたつて、自力他力ともに「信をもつて能入となす」とあるように、仏・法・僧の三宝に対する信は絶対であるが、とくに淨土教についてこれをみるならば、現代において大きな問題が介在しているようである。

自力道において、果たして所期の目標の成仏を実現し得るか否かは別としても、それに向かつて進んで行くことは、人は誰でも、よくなりたいという願いはもつてゐる、つまり理想を抱いて前進しようとしている。ただ現実においては、思いがけない障害があつて中途で挫折したり、あるいは悪友に誘われて墮落の淵に沈んだり、またいろいろの疑問がでてきて虚無的になつたりするが、ともかくもそ

かくして夜の更けるも知らずという程に木村さんの法話は続いたのです。ここに宿泊されて、翌日帰えりの自動車を門前で見送つた時に、狹心症の丸薬をそつと口に入れられるのを見て、疲れが出ねばよいがと心配したが、帰園してから前記の手紙を貰い、まず安心したことでした。翌日の後片付けは、又長崎の松本兄等に手伝つて頂き、予定の電車に間にあつまで、法味の花が咲き、まだまだ一道会の余韻は続いて止みませんでした。老生も来年はどうなつか等自分の死が自分で判明しない、一番大事な自分の死が、自分にはさっぱりわからぬ、愚もここまでくれば極愚といふも舌足らずである。

大きな風が、白い風と黒い風と一緒に常に吹いて息まない。絶対現在といわれる如来の光明無量、寿命無量のお呼び声は常に私を呼び続けて息む時がない。歎異抄第九章の大慈大悲心に心温まり身安まるのであります。

の出発点においては、一応ゴールに向かう姿勢をとるのが普通である。こうした意味において、自力聖道門の教えに對しては、事の成るならぬは別として、方向そのものには、何人も疑問をさしはさむ余地はない。ところが、その道は「難行の陸路」にたとえられるよう、苦難に満ちた道で、前進どころか、逆に一步を踏みだしたとたんに、自己の罪悪の深さに気づかされ、その無力に悲泣せざるをえなくなり「罪惡深重、煩惱熾盛」のわれらは到底望みえないものとなつてくる。

そこで他力淨土門の教えは「水道の楽しさ」にたとえられるよう、仏の本願力に乘托してさとりの彼岸に往かしめられるのであるから、悪人も愚人ものこらず目標に達するのであるが、ここに一大難関が横たわつてゐる。科学の洗礼を受けた現代人にとっては合理性が金科玉条で、理論的に筋が通つて、かつ実証されるなら納得する。とくに世の経験も浅く科学を過信する者には至極当然のこ

とである。しかし宗教の前に立つ時、人間の真相を知ることが先決問題である。自分は何者であるか、どちらへ向かっているかがはつきりしなければならぬ。自分の力も技も知らないで、単に抽象的に理想に向かつたのでは雲をつかむに等しい。私はここで自分のささやかな体験を誌す。

私は東北の真宗寺院の四男に生れ、少年時代は平穏無事に過して、十五歳の時、東北では珍しい秋晴れの続いた日、父が中耳炎から急性脳膜炎を起し、僅か四五日の病床であつたが、見るに忍びないような苦しみの中で息絶えた。時に父は四十七であった。それからの私は十年間といふものは、全く灰色の日々を送らねばならなかつた。ともかく私の求道生活はそこから始まつたといつてよい。私は真宗教義の概略や、聖人の教えの要点は、父や叔父や、他の説教者に聞いたり、「歎異抄」なども読んで、知的には一応知ることが出来た。

しかしどうしても合点がいかない点は、改悔文にある「雜行雜種」のところをふりすぎて「一心一向」というところであつた。人は大善大行はできなくとも貧者の一灯で、小善小行が出来るでないか。何故それを捨ててしまわねばいけないのか。ここが引っかかる。「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせ」というように素直に受けとれなかつた。

今から思いおこせば、まことに慚愧の至りであるが、法然

上人のお歌「さえられぬ光もあるをおしなべてへだて顔なる朝霞みかな」の「朝霞」で私はあつたのだと、十年の求道の旅を経て、あい難い善知識にあうことことができて「難中の難これに過ぎたるはなし」としていたのは、おのれの邪見驕慢であつたことに気づかせていただいた。それから早くも四十年の歳月を経過し、細々ながら「念佛もうされる」身にさせていただいている。まことに「たまたま行信を護ば遠く宿縁をよろこべ」である。

以上私は、ささやかな信の旅について告白したのであるが、この体験を通して云いすることは、現代においての信仰生活に入るには、何といつてもその第一歩に、自己をよく知ることによって人間の真相をきわめることである。もしこれなくして、頭の中だけで考えてみても、私がたどつたような過ちをくり返すことになるだけである。邪見驕慢の自己を知ることが先決である。そして、そのためには、あくまで謙虚に自己をかえりみることである。ニイチエのことばとして伝えられている

「おのれの立つているところを深く堀れ、さすればかならずよき泉あらん」

とのとおりである。

ピーパー師を憶う

自叙小記

小説

先ず最初にピーパー師が歎異抄に対する所感は、

「たとえば人を千人殺してんや、然らば往生は一定すべし、と仰せ候い時、仰せには候えども一人もこの身の器量にては、殺しつべしとも覚えず候と、申して候いしかば、さては親鸞が云うことをたがうまじきとは云うぞと。これにて知るべし、何事も心にまかせたることならば、往生のために千人殺せと云わんに、即ち殺すべし。

しかれども一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり。我が心のよくて殺さぬには非ず。また害せじと思ふとも、百人千人を殺すこともあるべし。それから後、歎異抄のいろいろの個所について、深く味わい読むようになられた。

一九五四年十一月十六日に西本願寺の大谷光昭猊下がベルリンにおいてになつたのを機会に、ピーパー師が、西本願寺のベルリン支部として、ベルリンの仏教協会の方向転換をはかりたいと申し出られた時は、正直云つてちょっと心配であった。私の気持としては、本願寺支部云々ということより、先ず信仰が大切であつて、要はピーパーさん御自身が仏に直接に接しられることである。これなくして宗派を起すとか何とか言つても無意味であるということを申上げたい気持であった。

信仰の余瀝は、ドイツ人に真宗の信仰を語るには本当に適切な本であつた。福島先生が独文で序文をお書き下され「信仰の珠玉」という題まで頂いたが、ついに今日までこの独訳は出版になつていない。一方福島先生の、近代思想と信仰は「自由と信仰」という題で「仏教における内的自由について」という副題をつけてカールアルバー社から一九五六年に出版された。ドイツ人好みの哲学的表現を用いて、ファウストを始め、西欧の代表的文学作品を引用し、信仰の本質を説かれた点でドイツ人にとって、よき入門書となつたことと思う。

ませんか。

当時のドイツにおける仏教界の様子は、菌田香勲師の「有と無」に詳しく述べられているように、南方仏教と禅に関心を示す程度で、その中でピーパー師が真宗の信仰に生き、宗教的活動を続けられるには大きな苦難があつた。師が今日までに私に下さった手紙は全部で二、四十通に達するであろう。これらの手紙はほとんど隨所に歎異抄の言葉を引き、師御自身の信仰についてお知らせ頂いている。これに対して私は充分な返事を差し上げることができなかつたのは残念である。いずれこれの手紙は、師の精神的発展の過程を追つて、まとめさせて頂きたいと思つてゐる。ただ本稿では一九六七年二月付の手紙の一部分を載せ、師の信仰の一端を紹介させて頂きたいと思う。

私は宗教的経験を言葉でよく表現する能力を持ち合せていません。然し言われてることは本当であるということが確かめられました。純粹に外見的に見れば、私は一九六五年と一九六六年に非常な病氣をしました。ある部分は非常な痛みを伴い、非常に強い薬を注射しても克服することが出来ませんでした。しかし一瞬といえども私は内的に不幸ではありませんでした。痛みのために涙が頬を流れるときでさえも、本当にそれは不思議ではあり

又仏を讚歎する余り、ヨーロッパ人特有のオーバーな表現でいろいろな有難いという形容詞をやたらに使うことに私は抵抗を感じており、真宗の信仰は、有難い信仰を人間がこしらえるのではなくて、仏の大悲心に催されて、信ぜずにはいられなくなるのであることを申し上げたかった。然し、これらのことは後述のピーパー師の手紙文が示すように、全く杞憂に終つたのである。

私の講話はしかしながら決して充分なものではなく、語学力の問題を含め、話が終つたあと満足感を覚えるには程遠いものばかりで慚愧の至りであった。最後の頃は三・四人程度しか集らなかつたが、誰か一人でも本当に聞いて下さつたらという願いを持つばかりであつた。

信仰の余瀝は、ドイツ人に真宗の信仰を語るには本当に適切な本であつた。福島先生が独文で序文をお書き下され「信仰の珠玉」という題まで頂いたが、ついに今日までこの独訳は出版になつていない。一方福島先生の、近代思想と信仰は「自由と信仰」という題で「仏教における内的自由について」という副題をつけてカールアルバー社から一九五六年に出版された。ドイツ人好みの哲学的表現を用いて、ファウストを始め、西欧の代表的文学作品を引用し、信仰の本質を説かれた点でドイツ人にとって、よき入門書となつたことと思う。

の賢明な教授の方々の名前を私は忘れてしました。その中の一人の方が四ヶ月ベルリンに滞在して我々と知りあいましたが、帰国されるに当たり、ヨーロッパを発つ前に絵葉書をくれまして、「一体私ノがそんなに大きな影響を人々に与えている所以はどこにあるか!!教えて下さい」と書いて来られました。

私の親愛な同朋である貴方は私をよくご存じです。貴方は私が決して卓越した話術を持つている者ではないことを。輝くような講話で周囲の人々に感銘を与えたり、誰かに影響を与えることができるような能力を持つている者でないことを確かにご存じです。私はそのよき教授の方にただ次のように書くことができるだけです。私は全く何もしないのです。それはただ生きた、すべて未通った弥陀の光明の働きです。そこから周囲にいつも作用があらわれてくるのです！そして今あなたの親愛なるお手紙を読むと、あなたもこの見地に立っていることが分ります。大きな弥陀の慈悲によつて、そしてこの教を再び我々にひろめて下さった我々の祖師親鸞聖人のよきおはからいによつて、現在あることそのままですべてよいのです。なお今日私は毎々歎異抄を読んでいます。そして私はこの世を去るまでこの本を読み終えるということはないであろうと思います。というのは何時も私は

何か新しいものをそこに見つけ出すからです。
勿論見たところ私は年をとつてきました。そして病のために弱ってきました。背柱癒着のためと、医師が云うように、私の心臓が非常に悪いために、私は杖をついてゆっくり歩きます。しかしもう一度申しますが、それでも私は幸福です。そしてそれはたゞすべてを攝取される弥陀の慈悲のままものにすぎません。それこそ有難いといふ外はありません。そしてここ感謝のために、私は他の人が望めば、この無限の力をもつた、幸せをもたらす教えを伝えるために、私のできることをしますし、これからも私が何かすることができる限り、やつて参りたいと思います。そしてこれらの経験は、お念佛の立派な定義のすべてよりもっと確かな証拠のあるものです。それでから私は貴方に全く確信をもつて申上げられるのです。知的な学問はこの光りには何も導いてくれませんと、そして唯一のものはゆるぎない信仰だけであると。ただ教と一緒に信仰を伝えることが出来ないという事実に直面するときは、しばしば私は悲しくなります。しかしながら歎異抄にあります「淨土の慈悲というは念佛していそぎ仏になりて、大慈悲心をもておもうが如く衆生を利益するをいうべきなり」と。この可能性が我々に残され

れているのであります。

この手紙の内容が示すように、何よりも私の心を打つたのは、師が歎異抄を通してすでに直接に私に遭つておられた点であつた。

師と最後にお話したのは今から七年程前、私がミュヘンを発つて日本に帰る直前の電話であつた。聞き慣れたビーパー師の話し方は以前と少しも変つていなかつたことを覚えていた。しかし今日あるを予見するかのように、内容は老と病についてであつたように思う。

一九七八年九月十九日に急にお亡くなりになつたという通知を御家族から頂き、熱い涙のこみあげるのを抑えることができなかつた。本年（一九七九）の秋、渡独する機会に是非お目にかかりたいと思つていた矢先の此の世のお別れであつた。

いて、京都の山崎昭見師が、御縁の深い岡山大学の山田宰様に原稿を依頼されました。それにこたえてようこんで執筆されたのが、この原稿であります。

もう八十年も前に、近角先生や池山先生が中心となつて、ベルリンの花祭りを催されましたが、その後この行事はベルリンで続いていた由であります。遠くあつい御縁の地に、念佛の花が咲き、池山先生のドイツ語訳の歎異抄が読まれてゐることは、当然の驚異であります。願わくば国境をこえ、ことばに障えられず、眞実の教が世界に扉を開いて流布されますことを祈念しております白井先生が口癖のよう、歐州は二元対立の域から出ていないと言わされました。この対立抗争の世界に、絶対眞実の教の光りがとどけられて、そこに大きな光となれかしと切望してやみません。

国際真宗文化協会の仮事務所は、

京都市東山区大和大路五条上ル、山崎昭見（龍谷大学教授）宅であります。

（註）一昨年来発足した、国際真宗文化協会を中心となつて、英國のロンドンを中心として、ロンドン大学講師の稻垣久雄氏の編集によつて『淨土』と題する真宗を骨格とするジャーナル（英・独・仏語）が発刊されることになりました。その第二号に、昨秋逝去されたビーパー師（ベルリン浄土真宗協会司宰）の追憶号が出されるにつ

かの遠大な運動に淨財援助を提唱の方々から申出でおられます。

（花田記）

念

仏

詩

抄

木 村 無 相

和上 || 禿頭誠師

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

和上おおせに
四日市の文右エ門いわく
日ぐれ前の大仕事を
うけとつていそがしい

あ あ このココロが

ことじや
うかうかしてはおられぬ
日ぐれ前とは
今が日ぐれ前

和上おおせに
"ココロが
迷うてゆくなり
カラダは

捨(す)てゆく——
ココロが
ココロが
ココロが

大仕事というは
今の後生の一大事の
解決——
うかうかしている
ひまはない

死に甲斐も
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

このココロが
迷うてゆくなり
迷うてゆくなり
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

法 信 抄

今日は「念佛詩」約二十篇ほど、とりあえず、とどけさせていただきます。
相変らず「和上おおせに」で、誌友の方に申しわけありませんが、「求法用心集」さえ拝読しておれば、考えたり作ったりするまでもなく、ホウフツと思いうかんでくるので、そのままメモするだけであります。
ムリして作るのでありませんし、清書というようなこと出来ませんので、どうか御勘弁下さいませ。この中からのせられそうなのをおのせ下さいませ。

どうか、くれぐれも御心配なく、お願ひします。云々。

和上おおせに
四日市の文右エ門いわく
日ぐれ前の大仕事を
うけとつていそがしい
ことじや
うかうかしてはおられぬ
日ぐれ前とは
今が日ぐれ前

大仕事というは
今の後生の一大事の
解決——
うかうかしている
ひまはない

生き甲斐は
ナムアミダブツ
生き甲斐あつたか

天 上 月 一 輪

花 田 正 夫

木村無相さんから「心筋硬塞から心臓喘息をおこすと、お念佛も申せなくなり、唯苦しい、苦しいばかりであります。病苦がひどく迫った時は、凡夫の生地むぎ出しに、痛い痛い、苦しい苦しいだけで、死なせていただく。それもまあ一つの大往生でもありますか云々」と、病苦の打ち明け話のおたよりを貰いました。

○
また先日、若い人の運転した自動車が衝突し、その一台が飛んできて、そのまま人事不省におちた信友を病院にお見舞したら、「気がついた時は病院で、右脚の関節の骨折腕などの傷で、あまり痛くて二晩も一睡もできずで、ただお念佛ばかりがありました。御本願一つがちからになつて下さいました云々」ときかせて貰いました。

それについて、九州の篤信の師、酒井幽演師が、腎臓病

がすすみ、いよいよ最後の近い日の辞世の歌に
病みつかれ み名一声もとなええず
弘誓のみむねいよよとうとし
と「極度の衰弱と高熱。目がまい、世界が廻る、目があかぬ、聞くことが辛い、言葉の发声が苦しい」という中での遺詠でありましたが、思い出されました。

○
更に、近角常觀先生著の歎異抄講義の中で、第一章の「弥陀の本願には老少善惡の人をえらばれず」を引かれ、これ等の文字を單に文字として味うては弥陀の本願をいたぐことは出来ぬ。眼前の事実で知らして貰わねばならぬ。数日前にも発狂して絶食して心臓マヒで亡くなられた憐むべき人があつた。其人の近親が信仰家であつたために、臨終に及んで、力をこめて如来のお慈悲を説いて聞かせ、ただ念佛せよ、と勧めたところ、口を指して稱えることが出来ぬという事を知らした。それなら私が稱える故に、そ

の心持になるんだよ、と云うて其人を抱き、いただきに接して念佛している間に、頭をうなずき、心中非常によろこんで久しからずして亡くなれたとの事である。この人は口に稱えることさえも出来なんだ。唯ああ有難いと頂いただけで、口までも出ぬのである。これこそ實に「弥陀の誓願不思議に助けられまいかせて往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛申さんと思いたつこころの起るとき、すなわち攝取不捨の利益にあづけしめたまうなり」の具体的の御教化である。と述べていられるのも改めて味わわせていただきました。

○
易行院法海講師が終焉に臨まれて
「今になつてはもう学問も、了解もいつたことでない。
おぼえたことも知つたことも何にもならぬ。ただ彼處に御座るみ親様の御念佛」つで、これなりお取り下さる
と仰言つてゐる。

○

白杵祖山老師の病床遺稿に
昭和二十三年三月、京町の山田博士の御診察をうけ、腸癌であることが明了になり、其上に先ずよく持つて、向う一年間、若しくはそれ程保たれないかも知れないことを知

らせて頂いた。今まで病名の分らない間は何となく知りた
い、知りたいの不安があつた。今日は始めてその思いを達して安心した、ああよかつたと胸を撫で下した。
病院を出て帰る道すがら、又帰宅しても、ああよかつた自分の平生の怠弱な心持では驚きもしよう、それに案外安心して居られるのは、全く只事ではないことを尊とまれた。永い永い年月の間、何時ということなしにお育てをたまわつた如来様のお慈悲のしからしむものであることが仰がれ
る。

覺悟だに要なきまでに御仏の

そだてたまいまいし恵み尊し

一息は一息ごとに死の嚴頭

こゆる御声は 六字名号

仰ぎつつ稱する御名に先き立ちて

くるいみだるる 煩惱の鬼

碍りなくすべてを照らすみひかりは

さわりある身のうえにこそ照る

であつた。

○

木村さんが「和上仰せに」の念佛詩を続けて下さつてい
る、和上、源通寺老院の辭世に
定散のかざりをしてまるはだか

とあり、遺渴には たゞ願力にひかれてぞゆく
七十年何の成すところぞ

十一
唯一句実在する有り

南無阿彌陀佛

と誌され、平常の仰せにも

「大津波にのくるものは、天上の月一輪。仰せが仏法な
。月、水、火、風、日、月、星、諸天、諸魔、諸鬼、諸魔
」

り。聞いた心が仏法ではない。仰せたけが眞実のこと」とあり、晩年の御自督には宿業でたとえぱけても狂うても たがえたまわぬ弥陀の約束と、お誓い一つを渴仰していられた。

○
昭和十三年十一月八日に念佛の息絶えおわられた池山榮
吉先生のこの世でのまとまつた最後のお言葉は
何も残るものはない

何も残るものはない
ただ念佛だけが残つてくれる
ただ念佛だけが残つてくれる
偉いこつたよ、有り難いこつたよ
であつたと、友子夫人が聞きとつて下さつたのでした。

心に浮かぶままに、諸先生の金言、実語をならべました
が、西岸上よりの如来招喚の御声一つに一切がおさめら
れてみ仮のみくに~~火~~かえらせていただくばかりであると、
私自身うなずき、うなずき筆録させていただきました。
終りに蓮如上人の御歌、

攝取不捨

石田十九三

妻との別離

この年も寒い冬でした。粗悪炭は戦争が拡大するにつれ
いよいよ粗悪炭ばかりで、ボイラの戸を開いて見ると釜
の中はローソクの光があちらにもこちらにもチロチロ燃え
ている様な有様で、デレッキで搔き廻さなくては蒸氣が出
来ません。三缶のボイラーを次々に搔き廻して歩くのだから
ら、とうとう右手が肩から指先まで急性神経痛になつてしまい、朝起きる時は肩から指先までシビレ、右片腕が動
かなくなり、左手で指の運動して、それから左手で肩の運
動をする有様でしたので、遂に仕事をやめることにしまし
た。

昭和十五年二月に友人の紹介で、大阪の海軍軍需工場に勤めることにきまり、尼ヶ崎市杭瀬に家を借り引越ししました。大阪の工場では資材課の仕事を致しました。資材が入荷しないと機械が作れないので鉄板商、鋼管商などの資

材を買ひ入れるのに町を廻つたものです。その中で私の工場は航空機の色々な部分を造る工場でしたので海軍管理工場となり、中部軍管区司令部から資材の支給を受ける事になりました。司令部に申請しても何やかやと云うてなかなか書類に添印して呉れません。先輩に聞いて見まして驚きました。係員に一杯飲まさないと、なかなか印をおして呉れないとのことでした。今、日本が国を挙げて戦っているのに何とした事だらうと思いました。各工場も寮という名目で幾ヶ所も寮を持つて居るとのことでした。初めは先輩が招待の方をしてくれましたが、先輩達が次々と招集をうけて出征しましたので私の番に廻つてきましたが、私は田舎で漁師をしていて二十才前でも大分飲んだものですから、キリスト教に入りましたから酒も煙草も止めて居りましたが、飲むと飲めるという自信がありましたが、飲まさなければ添印をしてくれないという事が心の底にひつかかっていやりました。

秋に妻がヂグエンという病気になつて高熱を出し、心配しましたが、一月余りで全快しましたが、翌十六年に、又

床につきましたので、京都の生母が介抱に来てくれましたので安心しました。妻は昭和九年頃に肺炎を患い、川畑愛義博士に治療していただき、其後は元気になつて居りましたが、昨年の四十度以上の熱のために再発したのだと医師は申して居られました。

病気が段々悪くなり、亡くなる一ヶ月前に、宮地先生がわざわざ御見舞に来ていただき、先生は妻に色々と阿弥陀仏のお慈悲をお話し下さり、妻も非常によろこんで居りました。私が杭瀬の駅まで先生を見送つて家に帰ると、妻は先程まで寝ていたのに上体を起して、合掌して居りますので、どうしたかとたずねますと、仏様が今帰られた方を礼拝して居りましたと申しますので、先生はもう大阪に着いて居られるよ、早く休まなければ、後で苦しくなるよ、と申しやすませました。

もう思い残りはありません、喜代栄ちゃんのことをお願いしましよう、と申して居りました。その子は私と共に子供がないので、私の兄の末子を貰つて育てて居りました。三才になつた頃でしたので、妻を生母と思って仲よく暮して居りました。妻の母が来るまでは、学校から帰ると水を買ひに行き、医師に薬を貰いに行つたり、お母さん死んだら申しやすませました。

いやよ、お父さんがお仕事にいくと私一人になつてしまつもの、と、何時も云うて居りました。妻は亡くなる三日前の朝、私に、有難い夢を見ました、私が仏様にならせていただいた時に坐る蓮の花が開きましたよと。私も全治はむつかしいと覚悟をして居りましたから、御信心のお蔭だよ、苦しい時は心の内で、楽な時は声を出して報恩の念仏を申しなさいよ、とこたえました。

九月十七日の日暮にとうとう亡くなりました。葬儀もすみ、初七日もすみましたので、娘を生母の家に送りとどけ色々とお願いして杭瀬に帰ると、妻の生母が、留守居をしててくれておりました。

その母も翌日、京都に帰り、私一人ぼっちになりました。仕事から帰ると位牌の前で、正信偈を涙ながらに誦しました。私共はご信心に入りましたしてから七年間は、私の一生で一番幸福な年月でした。その頃家庭とは、こんなに心温く、休まるものかとつくづく思いました。

妻を先きだてましたからは、家に帰つて寝るまでの時間を持てあましました。本を読んでも落着かないし、とうとう近くのお寺に参りました。そこは本派本願寺の末寺でありますので、初め新譜の正信偈和讃を習いました。次は阿弥陀経、次には十二禮讚を習いました。その頃教えて下さった役僧の方が召集令状が来ましたので終りになりました

た。日曜日には池田市の堤様宅の法話会にお参りするか、

豊中市の玉田様宅の法話会にお参りさせていただきました。仕事は、先輩達が召集をうけ会社を止めるので、いよいよ多忙な日が続きましたと共に、私に招待役が廻つてきました。当時、会社で招待する寮が二ヶ所ありました。初めての時は係員殿はどれほど酒を飲んでも酔いが廻らない酒豪でした。君、ちつとも飲んでいないのではないか。飲め飲めと云う有様で、どうとう私が酔つてしまつてから書類に添印をして下さる有様で、私はこれは大変な仕事だなと思いました。

そのうちに人手が少ないので運輸の仕事をさせられ、貨物駅の梅田の五号門がクレンもあり、重量物は此処で貨車に積み込むのですが、仲々積んでくれません。長く貨車積みが出来ないと、自動車代とか馬車代が高くつくので、五号門の主任と心安くならねば積込がおくれるので、煙草や酒を持って行き心やすくなるより方法がありませんでした。この様なことをして戦争に勝つことが出来るのだろうかと思いました。

その内に妻の一周年もすみ、私は大阪で会社の近くに部屋を借りて住むことにしました。会社までは五分も歩けばよかつたので好都合でした。

円朝と山岡鉄舟

天竜寺の滴水和尚が上京したとき、当時世間から名人とほめられていた三遊亭円朝を呼んで、落語を聞いたが「円朝さん、あんたの話は大変にうまいが、しかしみな舌三寸の話じや。その舌をはななければ本当にうまいとは云われぬ」と評した。

それを聞いて、円朝は不満そうな顔をしていると、そばに居た山岡鉄舟居士（剣禪一致の極意を得た人）が「今わしがあんたの舌を抜いたらどうする」と評いた。

円朝は驚いて、「私の今日あるは、この舌のためでがある。この舌を抜かれたら飢死するだけです」と言つた。鉄舟居士はそこで

「だからお前の話は舌先の話だ。自分は一刀流の極意を皆伝されたが、今では無刀流である」と叱られて初めて慢心が辟かれて、「わたしでもその道を得られましょか」となり、熱心に参禅して遂に心眼が開け「無舌居士」と禅師から印可をもらつたのである。それから終生鉄舟居士を慕い、墓地も同じ所を遺言している。

あとがき

歎異抄に「本願」が五十六回、「念佛」が五十回、「往生」が三十六回、くり返しまきかえして出ておりますが、結局、弥陀の本願を信じ、お念佛申させていただき、やがて身命終と同時に、往生成仏させて頂くことを教えて下さるのであります。しかもこの本願は煩惱具足の身、いずれの行も及び難き者のために建立されたのであります。

ところが、現実の救いを軽視して、往生ばかりに目をつけるのも、反対に往生を輕視して現実の救いに有頂天になるのも、いずれもかたよりであります。たすけられたことの喜びと同時に、たすけられうずることのありがたさを喜ぶことを蓮如上人もならべて仰言つています。

白井先生の「二世の利益」はこの要所を詳しくおのべ下さいました。先月号と一緒に御味読願います。

一道会の記は、本月で終りました。吉野から参會下さった北岡行男さんのお話の中に、六高時代から池山先生に親しく導かれたのに、先生の御存命中に信が開かれず、五十四才で大安心の身となられた、三十余年の求道の姿に頭が下りました。又人生の幾多の順逆の両縁を念佛一つでこえて来られたうらに深い深い御仏縁を拝しました。

文字通り一期一会の会合に出られた木村さんの「絶対現在」の味わいもありがたいことでした。残念ながら私は早々に帰途につき、その座に居りませんでした。

山田宰さんのピーパー師の追憶記は、ペルリンの不思議な出来事でした。ゲーテやニイチエや、ルーテルの出たドイツには、

歎異抄を読む基盤があつたのだな!と今更にありがとうございました。ニイチエの「人間の経験する最大なもの」は、自己蔑視である」と云いましたが、見さげはだけでは

光がありません、ここまで熟した人が不幸にも歎異抄を知らずに、暗いまんまと亡くなりましたのはいたわしい限りでした。

松本達雄さんを偲んで「法灯をかける」の書から頂きました。有縁の方々の御一読をお願いします。西元宗助様の原稿は今月は都合で休ませていただきました。御諒承下さい。

木村さんは、病状よいともわるいとも見えない状態とのこと、一通一通の法信も、一期一会の筆跡が感じられます。

・石田さんは、言いすぎも、言い足らずもない正直な記録であります。ありのままにものを書くことは非常にむつかしいことで、いつも煩惱にさまたげられるのです。「腹張つてねられぬままに明け鳥」と山岡鉄舟居士は辞世の句をこしましたが、洪川禪師がこれを讀えたので弟子方も初めて驚いたと伝えられます。

△御案内▽

○毎月第一、第二日曜、午後一時半、一道会例会。一道会館の南隣り、南区駅上町二の八六。鬼頭康彦氏宅。

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

地下鉄、新端橋終点下車。

○教西寺法話会。昭和区小桜町二丁目四月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り。又は北山下車。

地下鉄、御器所通り下車。

定価半年七〇〇円(送共)
一年一四〇〇円(送共)

名古屋市南区駅上町二ノ八八

編集・発行人 花田正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

名古屋市南区駅上町二ノ八八

印 刷 人 坂 部 光 雄

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号四五七